

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	統括部局：研究推進社会連携機構	担当部局：研究推進社会連携機構
大項目	10 社会連携・社会貢献(研究科)《全学的な視点》	
中項目		
小項目	10.0.1 社会との連携・協力に関する方針を定めているか。	
要素	産・学・官等との連携の方針の明示 地域社会・国際社会への協力方針の明示	
小項目	10.0.2 教育研究の成果を適切に社会に還元しているか。	
要素	教育研究の成果を基にした社会へのサービス活動 学外組織との連携協力による教育研究の推進 地域交流・国際交流事業への積極的参加	

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 研究業績データベースを整備する。(研究推進社会連携機構)	→「研究成果の国内外への発信および評価における実績」「文部科学省など国内外の研究機関等による支援事業や研究資金への申請実績および採択実績」「研究業績DBへの登録率(=研究業績等のDBへの反映率)および更新率(履歴や研究業績等について何らかのデータ更新を行うこと)」(研究推進社会連携機構)	C	C	C	B	B
2. 知的財産の創造・確保・活用=知的創造サイクルの活性化を促進する。(研究推進社会連携機構)	→「研究シーズの紹介実績(研究推進社会連携機構ホームページでの公表実績)」「研究成果の事業化実績」(研究推進社会連携機構)	B	B	B	B	B
3. 「知財が解る関学生」を社会に輩出するため、知的財産教育の全学的取り組みを推進する。(研究推進社会連携機構)	→「知的財産に関する授業の開講数および受講者数」(研究推進社会連携機構)	B	B	B	B	A
4. 受託研究・学外共同研究・寄付研究を拡充し、産学官等との連携を強化する。(研究推進社会連携機構)	→「受託研究・学外共同研究・寄付研究の実績(件数、金額)」(研究推進社会連携機構)	B	B	B	B	B
5. 地域・自治体・地元企業等と本学研究者・学生の連携により、学生への学びのフィールドを提供するとともに、地域活性化プロジェクトを推進する。(研究推進社会連携機構)	→「地域・自治体・地元企業等との連携による学生への学びのフィールドの提供数及び参加学生数」「地域と研究者・学生の連携による地域活性化プロジェクトの実施数及び参加研究者数・学生数」(研究推進社会連携機構)	B	B	B	B	B
6. 大学(院)コンソーシアムの活動を基盤とした社会貢献活動・国際社会との連携を強化する。(研究推進社会連携機構)	→「大学(院)コンソーシアムの活動を基盤とした社会貢献プログラム・国際プログラムの実施数及び参加学生数」(研究推進社会連携機構)	B	B	B	B	B
7. 大阪梅田キャンパスにおける社会人(同窓・団塊の世代)に向けた連続教育講座を開講する。(教務機構)	→2010年度から3年間における「受講者の満足度」「定員充足率」「収支の均衡」(教務機構)	B	A	A	A	A

8. 各種生涯学習プログラム（既存事業）の運用につき定期的検証を行い、スクラップ・アンド・ビルトを行う体制を確立する。（教務機構）	→「大学としての重要性」「受講者の満足度」「定員充足率」「既存プログラム毎の収支の均衡」（教務機構）	⇒	B	B	B	B	B
9. 生涯学習課プログラムの実施において、学内・外の機関とより一層緊密な協力関係を構築する。（教務機構）	→「学内・外機関との共同推進の割合」（教務機構）	⇒	B	B	A	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」		2009	2010	2011	2012	2013
	→	⇒					
	→	⇒					

《進捗状況(達成度)報告》 **担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。**

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 次のスケジュールにより、現行の研究業績DBを新システム(研究者DB)へリプレースする途中である。 2013.6.11業者選定プレゼンテーション実施、2013.7.2研究支援センター会議・2013.7.9機構長室会において開発業者を「株式会社SRA東北」に決定、2013.9研究者DB仕様決定、開発開始、2013.10～既存データ移行作業、2014.7運用開始(予定)	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か リプレース作業中のため、評価指標に挙げたDBを整備したことによる効果(DB登録率、DB更新率のUP)は現時点では不明。現行の研究業績DB(既存データ)を機械的に移行したが、1対1対応ではなかったため、かなりチェックが必要であった。今後、2014.6には、2014.7.1の学外公開開始に向け、対象者に現行DBからの移行データの確認と情報の追加登録の依頼を行う。追加登録には、これまで掲載されていなかった「教育実践上の主な業績」「社会貢献活動の業績」も入力するよう依頼する。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 2014.6.17～19に利用者説明会を開催し、研究者DBを公開する意義、操作方法・入力方法、及び新しい機能(researchmap(JST)とのデータ連携、本学リポジトリ(KGUR)への登録依頼、外部DBからの業績インポート、科研費の研究計画調書への研究業績出力、教員個人調書への出力、英語での表示等)について説明を行い、DB登録、更新のUPを目指す予定。	☆
		その他	☆
目標2	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 「知的財産の創造・確保・活用＝知的創造サイクル」活用化の具体的な施策の1つが、機構ホームページで紹介する本学のシーズ数を増やす取組みである。シーズの掘り起こしのためには、日ごろから、教員・研究者とのコミュニケーションを密にとるほかはない。そのため、機構職員・産官学連携コーディネータによる研究室訪問、技術移転相談、イノベーション・ジャパンや新技術説明会等への参加要請等を行ってきた。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か ホームページで公表した研究者数・シーズ数は、2012年度研究者数31名、シーズ数52に対し、2013年度研究者数31名、シーズ数53と横ばいであった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 研究室訪問、技術移転相談、技術説明会への参加要請を強化し、研究シーズの掘り起こしを図る。	☆
		その他 2015.4.1に予定される理工学部3学科増設では、産官学連携等に関係すると想定される理工学部教員・研究者の人数は1.7倍(31名から53名)に増加する。シーズを掘り起こす機構職員・産官学連携コーディネータの充実が必須である。	☆

目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 近畿経済産業局と2010年3月25日に「連携講座協定」を締結後、4年目となる2013年度は、春学期に全学部生を対象に連携講座「イノベーション政策と知的財産入門」(西宮上ヶ原キャンパス・春学期・4時限)を開講した。また、「知財が解る関学生」としての人材育成の一環として(株)パトライト(三田市)に学生1名のインターンシップ派遣を行った。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 連携講座「イノベーション政策と知的財産入門」の受講者数は、2012年度50名弱から2013年度225名と大幅に増加し、教育効果の広がりがあった。一方で、受講者数が増え、大教室での講義形態を行った結果、授業態度の悪化(私語・飲食・遅刻等)を招いた。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 2014年度も近畿経済産業局との連携講座「イノベーション政策と知的財産入門」を開講する。授業態度の改善については、授業管理(連携講座代表者、機構担当者による私語等の注意等)を強化するとともに、受講学生の興味を喚起する授業内容にすべく、近畿経済産業局等授業担当者と綿密に検討し、授業実施する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標4	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 「知的財産の創造・確保・活用＝知的創造サイクル」活用化の具体的な施策の1つが、寄付研究、受託研究、学外共同研究などの外部資金導入件数・導入金額を増やす取組みである。導入件数は、2012年度89件に対し、2013年度97件と増加したが、導入金額は、2012年度251,792,365円に対し、2013年度242,156,800円と微減であった。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 寄付研究、受託研究、学外共同研究のうち、民間企業との連携が主体となる学外共同研究については、前年度比で実施件数は微増であったが、受入研究費の額は大幅に増加しており、1件あたりの受入額単価が大きくなった。このことは、各研究シーズに対する企業の評価が高いことを意味しており、実のある成果の創出が期待できる。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 外部資金導入件数・金額を増加させる具体的施策としては、特許出願(知的財産の創造)や特許登録(知的財産の確保)件数を増やすとともに、本学研究者のシーズと企業等のニーズのマッチング機会を増やし、企業等との協業(知的財産の活用)に結びつけることが必要である。</p> <p>その他 2015.4.1に予定される理工学部3学科増設では、産官学連携等に関係すると想定される理工学部教員・研究者の人数は1.7倍(31名から53名)に増加する。今後、産官学連携活動実績を伸ばすためには、現有の機構職員・産官学連携コーディネータの充実が必須である。</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標5	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 地域・自治体・地元企業等と本学研究者・学生の連携により、学生への学びのフィールドを提供するとともに、地域活性化プロジェクト等の維持に努めた。2013年度は引き続き地域FW(西宮、宝塚、伊丹)や宝塚市・池田市・福井県勝山市との連携事業を推進した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 教務機構のカリキュラム改革により、2005年度より開講してきた学際科目地域FWが2014年度からは社会連携プロジェクト科目に改編されることになり、社会連携プロジェクト科目(西宮、宝塚、伊丹)の開講を申請したが不採択となった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 社会連携プロジェクト科目の不採択により、「地域活性化プロジェクト」を正課授業として実施することはできなくなったが、社会連携センターにおいて特に継続すべきと判断したプロジェクトについては、各地域の連携団体等の協力のもと、課外活動の枠組みで継続するとともに、同プロジェクト科目の2015年度採択を目指すこととする。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標6	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 「大学コンソーシアムひょうご神戸」では、加盟各校の連携強化と学生への効果的な教育プログラムの提供を促進するため、2013年度に理事会の元に企画運営委員会を設置し、活動の活性化に努めた。「西宮市大学交流協議会」では、学生力による活動の活性化のため、2010年度に「大学連携学生プロジェクトチーム(NCP)」を設置した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 「大学コンソーシアムひょうご神戸」では、企画運営委員会において当コンソのあり方等を議論し、運営の透明性とプログラムの充実が図られた。「西宮市大学交流協議会」のNCP活動においては、複数大学の学生が協力して企画・運営にあたることで、大きな教育効果が得られた。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 上記団体については現状の枠組みでさらなる活性化を図る。一方、2014年度から本学が理事長校を務める「特定非営利活動法人関西社会人大学院連合」については、事業内容・体制の見直しを行い、設立目的であるビジネスパーソンを主な対象者とした大学院への架け橋となる講座の充実と、大阪市からの要請でもあるアントレプレナーシップの養成などにも着手する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆

目標7	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 教務機構(旧教務部生涯学習課)が、社会人対象の講座として「K.G.梅田ゼミ」を大阪梅田キャンパスにおいて開設するべく企画し、生涯学習委員会に提案して、2010年度からの開設が承認された。2010年度から、毎年度、年2回(前期、後期)の企画、募集、運営を継続している。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2010年度からの3年間(6期)の平均満足度(「満足」および「やや満足」)は79%、平均の定員充足率は82%とかなり高い。また、収支についても、3年間とも収入が多い(黒字)で運営ができており、目標は達成できている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 「K.G.梅田ゼミ」は6回の構成やゼミ形式を基本としていたが、2014年度から講義回数や形式をもう少し自由に設計できるように、また申し込み方法についても先着順ではなく広く受講の機会を提供できるよう多数の場合は抽選とするなど改善し、名称も「K.G.ライフワークスクール」と改め、再スタートしている。大阪梅田キャンパスの日中の活用にも貢献しており、今後も継続していく予定である。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標8	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 教務機構(旧教務部生涯学習課)が、生涯学習プログラムそれぞれにおいて、おもに受講者アンケートを実施し、継続して内容の改善をはかってきた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 生涯学習プログラムについて、ほぼまったく同じ内容で実施したということではなく、常に次の企画を検討する際にはよりよい内容で提供しよう努めた。スクラップ・アンド・ビルドをする意識をもった運用は教務機構で十分なされており、「体制」をあらためては検討していない。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後も教務機構において、生涯学習プログラムの「大学としてのプログラム実施、運用の重要性」、「受講者の満足度」、「収支状況」といったポイントを中心として検討し、見直し、改善を継続する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標9	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 教務機構(旧教務部生涯学習課)が運営する「オープンセミナー」について、以前から共催してきた三田市との協力だけではなく、2011年度からは西宮市、宝塚市教育委員会、大阪府からも後援いただくような形をとっている。また、「K.G.梅田ゼミ」では、本学同窓会との共催であり、関西社会人大学院連合専門セミナーや西宮市市民対象講座など、学部や研究科とも協力して講座を提供している。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 「オープンセミナー」をはじめとする生涯学習プログラムについて、学内、学外機関と必要な協力、連携ができており、目標は達成できている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か ほぼすべての生涯学習プログラムは、学内他部課や学部、研究科、学外機関との協力のもと運営しており、今後も良き関係を維持しながら、連携、協力をしていく。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆